



デジタル序

上田知季

現場の課題解決が出発点

企業の枠を越えてBIMの未来を考えるイベント「BIM IDEATHON(アイデathon)」が、7年ぶりに開かれた。次代を担う若手世代のUnder 40(40歳未満)と中核世代のO40(40歳以上)が、日頃の業務でBIMと向き合う中で感じている思いを共有し、進むべきBIMの未来について意見を交わした。2026年春から確認申請ではBIM面審査、29年春からはBIMデータ審査が動き出す。まさに日本のBIMが新たなステージに踏み込もうとしているタイミングでの開催となつた。企業がDX推進に乗り出し、その基盤を成すBIMデータの利活用は多様な広がりを見せようとしている。その先導役となる中核世代のO40は到來した流れをどう受け止め、次の時代にどうつなげようとしているか。IDEATHONに参加したO40のメッセージを通してBIMの未来を描いた。



これが切符だった。

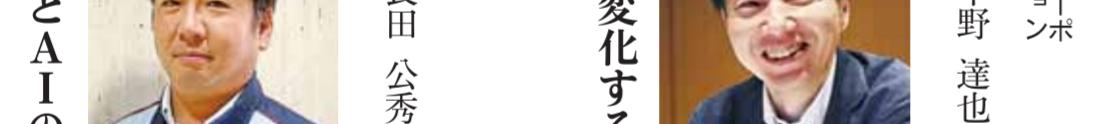
PLUS.1



継承・協創・挑戦の貴重な場

BIM IDEATHONは、あくまでデジタル技術ではなく、課題を解決するための手段であり、「現場で実感できる課題はどこに出発するか」という観点がとても重要だ。デジタル化とともに期待している良い点をかけ合った。この取組みを通じて、個社ではなく、業界全体でBIM化が進むことを期待している。

本音で語り合って、新しい視点や今まで語り合ったことのない視点も生まれる貴重な議論となりました。多くの参加者が率直な議論



データの活用価値創出

BIM IDEATHONは、データをもとにしたデータ活用がモデルから「データ」として本格的に実現する時代に入っている。どのデータをどう使おうかで、建設業の発展に繋がる時代だ。

IDEATHON 7年ぶり開催

BIMに携わる者同士が企業の枠を越え、未来に向けて意見を交わすことが開催の狙い。ボーダーレンバーパーとして7年ぶりの開催実現に尽力したのは安井謙介(日建設計)、大越潤(清水建設)、古川智之(次米建設)、山本敦(東畠建築事務所)の4氏。この取り組みに賛同する形で、PLUS.1と大塚商会が運営の下支え役として後援企業に名乗りを上げ、デジタル庁もオブザーバーとして参加した。中核世代のO40には総勢27人が参加し、5グループに分かれ、建設DXのあり方を議論し、業界改革の可能性や次のスタッフにつながる具体的なアイデアを出し合った。

PLUS.1株式会社
株式会社大塚商会
日刊建設通信新聞社
協賛企業

BIM IDEATHON



専門の垣根を越えて

各専門の設計情報を集約・連携・共有し、繰り返し作業はアルゴリズムで置換え作業の省力化を図り、設計者に創造的な検討を行う時間を確保する。法適合や他の定型的な確認書は構造計算を建物全体へ拡張する形で段階的に合理化する。従来の専門間の分業の垣根を越え、業務範囲や時間的制約でできなかつた検討により建築の質を向上させる未来を描きたい。



デジタルツインの進化

BIMの未来はデジタルツインの実現である。現在は建物の建設・施工・維持管理品質の向上や業務プロセスの効率化を目的としている。今後はBIMデータがデジタルツインとして価値化に留まっている。今後はBIM空間の融合によってデータ連携・蓄積・活用されることで、社会がより便利で快適になることを期待する。



BIM×AIが結ぶ

BIMは設計・時間・コストを統合する進化型システムへと成熟していく。今、AIを介して新たな次元が生まれ、分野を超えた創造性との関連性の幅を広げる「AIパートナー」となった。BIMの未来は固定的ではなく、生き物のように常に変化し、対話の促進と効率化を実現する。BIM×AIによって価値創造と伝統の進化を両立させ、人間中心の建築文化を育んでいきたいと考える。



人とAIの協調でDX前進

BIMの未来は人とAIが役割分担して協働する建設DXと建設プロセスの再構築が鍵となる。協働型DXではAIが反復作業や品質管理を自動化し、暗黙知を形式知に変換させる。人はデータに基づき判断と最適化された創造的な活動に集中する。BIMから創出するデータの標準化を通して、これまで指標化が難しかった初期開発の再評価を通じ、より人に寄り添った設計が可能になることを期待したい。



データの活用価値創出

BIMは建築から維持管理までのデータ連携することで初めて実現される。しかし実際にには「組織の壁」といった大きな課題がある。BIMは組織内の壁を超えて、組織間の壁を越える方が集まりやすい場合が多い。大塚商会もその考え方で、これから新たな探求と連携していった。BIMデータの易用性を一緒に考え、建築業の発展に貢献していくべきだ。

企業の枠を越えた議論

企業の枠を越えてBIMの未来を考えるイベント「BIM IDEATHON(アイデathon)」が、7年ぶりに開かれた。次代を担う若手世代のUnder 40(40歳未満)と中核世代のO40(40歳以上)が、日頃の業務でBIMと向き合う中で感じている思いを共有し、進むべきBIMの未来について意見を交わした。2026年春から確認申請ではBIM面審査、29年春からはBIMデータ審査が動き出す。まさに日本のBIMが新たなステージに踏み込もうとしているタイミングでの開催となつた。企業がDX推進に乗り出し、その基盤を成すBIMデータの利活用は多様な広がりを見せようとしている。その先導役となる中核世代のO40は到來した流れをどう受け止め、次の時代にどうつなげようとしているか。IDEATHONに参加したO40のメッセージを通してBIMの未来を描いた。

これが切符だった。

これが切符